「神の逆転の出来事」　　２０２５年１２月１４日　主日礼拝
ルカによる福音書　第１章４６～５５節

今日の聖書の箇所は、マリアの賛歌と呼ばれている箇所です。神様から聖霊によって身ごもったマリアが、その喜びを神様に向かって賛美したのです。

賛歌とは神様をほめたたえる歌、神様の御栄光をたたえる歌です。けれども、マリアにとって神の独り子を身ごもったことは決して手放しで喜べることではありませんでした。苦しい思いの中で決断したマリアは、これから先、彼女に起こるであろうたいへんな出来事、未婚の母になるかもしれないという覚悟も含めて、すべてを引き受ける決断をしたのです。そんな中で、マリアは神様への賛歌を歌います。

【わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。
身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったからです。
今から後、いつの世の人も、わたしを幸いな者というでしょう。
力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。
その御名は尊く、その憐れみは代々に限りなく、主を恐れる者に及びます。】

神様への賛美は、その人の置かれている状況によるのではありません。何ひとつ不自由ない満ち足りた生活を送っているからといって、神様を賛美できるとは限りません。いやむしろ、人は満ち足りた生活を送っているときにはかえって、神様のことを忘れてしまい、感謝や賛美をすることができないのかもしれません。

水野源三さんというクリスチャンの詩人がいました。水野源三さんは幼い頃、脳性小児まひにかかり、以来、歩くことも起きることもかなわず、その生涯をほとんど自分の部屋で寝たきりで過ごしました。源三さんはしゃべることもうなずくこともできませんでしたので、自分の思いを他の人に伝えることができませんでした。ところがあるとき、源蔵さんのお母さんがあることに気づきました。源三さんはまばたきで自分の意思を表すことができたのです。そこでお母さんは、源三さんにひらがなの五十音表を見せて、まばたきの回数で言葉を一言ひとこと拾っていき、源三さんの詩を書きとっていきました。こうして、水野源三さんはまばたきの詩人と呼ばれ、美しい詩集が残されていきました。その源三さんが詠んだ短歌にこんな歌があります。

【生きている　生かされている　歯が痛き　手足がかゆき　咳が苦しき】

歯の痛さ、手足のかゆさ、咳の苦しさは、どれをとってみてもとてもつらいものです。健康という観点からすれば、どれもマイナスでしかありません。しかし、水野源三さんはその痛み、かゆみ、苦しみこそが、自分が生きていることの証しであり、自分を生かしめたもう神様の御業である、と詠うのです。自らの小ささの中に神様の大きな力を認める。生かされていることの幸いを賛美することができるのです。

マリアが神様を賛美したのは、決して彼女が幸せで満ち足りていたからではありません。むしろ、たいへんな境遇の中で、それでも生きている、生かされていることを実感していたマリアが、その思いを神様への賛美として歌った。それがマリアの賛歌でした。

マリアの賛歌の後半は、こう歌われています。

【主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、
権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、
飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。】

ここには、私たち人間の常識ではとうてい考えられないことが書かれています。私たちの社会は、権力のある者が王座に上り、身分の低い者は下へと引き下げられ、飢えた人は腹を空かし、富める者は食べ飽きる、そういう社会です。しかし主は、その腕で力を振るい、私たち人間社会における上下関係をことごとく崩される。いや、それを崩すだけではなく、まったくそれを逆転させてしまわれる。すなわち、権力ある者を王座から引きおろし、身分の低い者を高く引き上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されるというのです。何かこう、わくわくするような、すかっとするようなことが主の手によって起こされる、そんな気分を抱かせる箇所です。確かに私たちは、権力者でも金持ちでもありません。いや、中には、自分は権力者だ、金持ちだという方がおられるかもしれません。けれども、ここにおられるほとんどの方々は、とてもそんなふうには見えません、知らんけど。

けれども、ここで一つ考えてみたいことがあります。それは、私たちが権力者でも金持ちでもないということは、これすなわち、私たちは身分の低い者、飢えた者であるということを意味するのだろうか、ということです。私たちは本当に、神様から引き上げられるべき身分の低い者、飢えた者の中に入っているのでしょうか。

マリアの賛歌の中に出てくる身分の低い者、飢えた者とはどういう人のことをいうのでしょうか。それは、神様の前で自らが身分の低い者であることを認めること、神様の前で自らが飢えた者であることを認めることなのではないでしょうか。これは、言葉にすると簡単なことのようですが、実はとてもたいへんなことなのです。身分の低いことや飢えていることを認めること。それは自分の汚れている部分、人には見せたくない部分、自分自身でさえも認めたくない部分を、すべて神様の前にさらけ出すことを意味します。人間には必ずそのような自分でもいやな部分がありますが、自分の醜いところ、きらいなところ、いやなところがすべて、神様の前にあらわにされる。私たちは、自分自身の手でそのようなことをなかなか行うことができません。自分のいやな部分を認めたくないのです。

ではどのようにすれば、私たちは自分のいやな部分を神様の前にさらけ出すことができるのでしょうか。どうすれば、私たち自身が身分の低い者、飢えた者になっていくことができるのでしょうか。それは、私たちが自分の力で成っていくのではありません。そうではなく、神様によってそのようにさせられていくのです。私たちは神様の導きによって、自分のいやな部分やきらいな部分を神様の前できちんと認める者とさせられていくのです。

マリアは、ヨセフという婚約者がありながら結婚する前に子どもを身ごもるという出来事の中に身を置きます。神様からそのように招かれたのだけれども、本当は引き受けたくない。できれば婚約者のヨセフと平穏に結婚し、平凡な家庭を築いていきたい。そんな思いを持ちながら、マリアは神様の招きに応えていきます。そしてマリアは、自分のような者が神様の招きに応えることなど、とうていできないことをよく知っていました。ですからマリアは、４８節にあるように「身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったからです」ということができたのです。

主によって、自分の醜さやいやな部分を認めさせられていくこと。主によって、身分の低い者、飢えた者にさせられていくこと。それは、自分自身を受け入れること、そのような身分の低い、飢えた自分であっても、その自分を神様が認め、神様が受け入れてくださっていることを認めていくことではないでしょうか。そのような身分の低い、飢えた自分

であっても、そんな卑しいこの私を神様が引き上げ、こんな飢えているこんな私をも神様がよいもので飽きさせてくださる。神の逆転とは、この卑しい女と自分で言わざるをえないマリアが、「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」とそのことを喜びに覚えて神様を讃美することなのです。神様の前に自分は身分が低く、飢えているということを認めた者が、しかしそのような者をも主の御用のために用いてくださることを心から感謝し、神を讃美し誉め讃えること。これこそが神の逆転の出来事なのです。

社会福祉の父と呼ばれた糸賀一雄さんという方がおられました。糸賀さんは、いわゆる知的障がい児の福祉や教育に携わり、近江学園を創設し、重症心身障がい児施設の先駆けとなったびわこ学園を創設した人です。重症心身障がい児というのは、知的障がいと身体障がいの両方を持つ人のことを言います。その糸賀さんが残した言葉に、こんな言葉があります。

【『この子らに世の光を』ではなく、『この子らを世に光に』】

糸賀一雄さんは、こう語ります。「この子らはどんな重い障がいをもっていても、だれと取り替えることもできない個性的な自己実現をしているのである。人間として生まれて、その人なりに人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちの願いは、重症な障がいをもったこの子たちも立派な生産者であるということを、認め合える社会をつくろうということである。『この子らに世の光を』あててやろうという哀れみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよ磨きをかけて輝かそうというのである。『この子らを世の光に』である。この子らが、生まれながらにしてもっている人格発達の権利を徹底的に保障せねばならぬということなのである」。

神の逆転の出来事はまさに、『この子らを世の光に』という視点なのです。弱く虐げられている人たちが中心となって輝くことができる社会を築き上げること。マリアはその神様に期待して、神を賛美するのです。

まもなく、私たちはクリスマスを迎えようとしています。この世でもっとも大きな神の逆転の出来事。それは、神の身分であられたイエス・キリストが、神と等しい者であることに固守しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分となり、人間の姿で現れたこと。すなわち、クリスマスの出来事です。

イエス様はこの世に来られました。それは、この世を愛しておられるからです。そのイエス様を送ってくださった神様は、私たち人間の社会がどのようになっていくことを望んでおられるのでしょうか。私たちの教会は、神様が望まれている社会を実現するために、どのようなことができるのでしょうか。神様を喜びたたえるとは、ただ口先だけで神様を喜びたたえるのではなく、それを実行していくこと、すなわち、神様の望まれる社会を実現していくということなのではないでしょうか。私たちの神様は、マリアの賛歌を通して神の逆転の出来事を私たちに示してくださり、それを実現するためにイエス・キリストをこの世にお送りくださったのです。このように、弱く貧しい命、小さくされた命を大切にしてくださる神様を、私たちも喜びたたえていこうではありませんか。

お祈りしましょう。